

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720099

研究課題名(和文)『海人の刈藻』を中心とする院政期物語文学研究の開拓

研究課題名(英文)Reclamation of the Insei period monogatari grammatica around "Amano karumo"

研究代表者

横溝 博(Yokomizo, Hiroshi)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30303449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：王朝物語『海人の刈藻』を院政期物語の代表的作品として位置付け、院政期物語の特質を捉える試みである。その結果『海人の刈藻』は、前時代の藤原頼通の時代の文芸の趣向や、同時代の歴史的な事実を取り込み、それらを『栄花物語』の叙法に倣い表現する、歴史物語取りの濫觴となる作品であることが明らかとなった。そして物語の内実は、協調融和による理想社会の標榜である。このように院政期物語は、頼通の時代の文芸を吸収し、かつ歴史物語的な叙法に学びながら、平和共存的な貴族社会の実現を目指した物語としてその特質をまとめることができる。この分析結果を一つの指標として王朝物語研究は新たな段階へと進むこととなる。

研究成果の概要(英文)：I place "Amano karumo" as "an Insei period story" and catch the characteristic of "the Insei period story". As a result, it became clear to be the story that aimed at the realization of the peaceful coexistence-like noble society while "the Insei period story" absorbed the literary arts of the times of Fujiwara Yorimichi and learning from historical novel-like method of description. Monogatari study will go ahead through this analysis to the new stage for one index.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：海人の刈藻 王朝物語 院政期 歴史物語 藤原頼通 中世王朝物語 栄花物語 引用

1. 研究開始当初の背景

王朝物語研究は『源氏物語』を中心として活況を呈しているようであるが、平安時代と中世の間に位置する院政期の物語研究、すなわち院政期物語文学の研究が手薄であったことは論を俟たない。

近年、藤原頼通の時代の文化世界と文芸の研究、及びその特質の解明が進みつつある中、平安後期物語の研究とリンクする形で、院政期における物語文学研究を早急に打ち上げる必要があると認識するに至った。

2. 研究の目的

院政期といういわば動乱期の時代において、物語がいかにか読み継がれ、作られてきたか。そのことを解明するにあたり、院政期を代表する物語である『海人の刈藻』を分析対象とする。

およそ20篇近くあるこの時期の散逸物語をも視野に収めるとき、研究の進んでいる『今とりかへばや』のみならず、『海人の刈藻』を同時に検証することは、広く院政期物語論のための作業仮説として有益である。『海人の刈藻』は同時代の資料不足を補う様々な可能性を内包した作品として、精査するに値する作品であるといえる。

以上のような理由から、『海人の刈藻』を、前時代の美意識の継承、先行作品の引用、表現の方法、人物造型、系図、作中和歌、物語の枠組みと構成など、様々な側面から光を当て、院政期物語としての特質を明らかにする。そして院政期物語論のための議論の活性化を促し、平安文学と中世文学を架橋する院政期文学の研究領域の強化と発展を推し進める。

3. 研究の方法

歴史・文学・美術・宗教等、学問領域を問わず、広く網羅的に資料を収集し、『海人の刈藻』を中心とした院政期物語文学の研究を、従来とは異なった観点から総体的に推し進める。

具体的には『海人の刈藻』の特質を、藤原頼通の時代の文芸との比較考察から明らかにし、あらたな作品論を展開する。具体的には『四条宮下野集』『相模集』『出羽弁集』など、頼通時代の私家集、また『狭衣物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』といった平安後期物語、あるいは『今とりかへばや』との共通性や差異に注目し、さらには『栄花物語』との比較検討を軸に、物語のみならず王朝日記文芸との関わりをも視野に入れることで、『海人の刈藻』の特質を追究していく。

4. 研究成果

『海人の刈藻』を詳細に分析・検討した結果、以下のような特徴があらたに見えられた。

(1) 『海人の刈藻』は、王朝貴族社会における撰閲家の栄達であるとか、貴公子の悲恋の

物語を軸にしている。しかし、その主題と呼びうるものが何かといえ、つとに指摘されているように、撰閲大臣家相互の協調融和による、平和的な貴族社会の建設であることが、あらためて浮き彫りとなった。そのような虚構世界がいかにかして作中において実現されているか。それは、作中に重要な役割を果たす按察大納言家の人々の尽力によってもたらされていると読める。このことは、物語史の展開を考える上できわめて示唆的である。

具体的には、『源氏物語』に描かれた数々の按察家と比較することで、『海人の刈藻』の方法は明確となった。すなわち、後宮社会での栄達を目指して、政略的に動いていた『源氏物語』の按察家の人々、そしてその挫折の運命を向こうに据え、『海人の刈藻』では、状況的に『源氏物語』と似たような場面を作り出しつつも、そこでの按察家の立ち居振る舞いを、自制的な、そして貴族社会全体の安定に寄与するような方向で描き出すことにより、『源氏物語』とはまったく異なる状況を描くことに成功しているのである。

『海人の刈藻』の按察家は大作家という格にはなれないものの、貴族社会において重要な位置を占めるに至り、それなりの栄達を遂げることになる。これは『源氏物語』の按察家の人々が、政治的野心を抱きながら、不遇な運命を呑んで挫折していった、その恨みを浄化するような役割をも果たしているであろう。

また、このような物語のあり方は、動乱時代を迎えていた院政期の政情不安など、貴族社会の混乱・混迷を背景に、物語が社会的にいかなる機能を担っていたかをも明らかにする。すなわち、虚構の世界ではあるものの、天皇を中心とした王朝貴族社会の理想的な有りようがそこでは標榜されているのであり、物語というジャンルが、王朝貴族社会の恒久的な平和を祈念するものに他ならないことを、『海人の刈藻』はいみじくも示している。また、按察家が重要な役回りを果たすのは、院政期に院近臣の勢力として、按察大納言が擡頭・活躍することと無縁ではない。

このように、『海人の刈藻』という作品は、政治的に院政という機構を作中に移すものではないものの、同時代とリンクしながら、理想的な貴族社会の実現を目論んでいく、きわめて社会的なテクストであることが明らかとなった。そのとき、一つの指標として、注目されるのが、前時代の藤原頼通の時代である。

(2) 『海人の刈藻』は院政期の前時代である藤原頼通の時代、またその時代の文芸と大きく関わっている。一般に平安後期物語といわれるものは、『源氏物語』の影響が濃厚であり、同時代的な特色も見え隠れはするものの、それ自体が主題となっていくことはない。しかし、『海人の刈藻』においては、それら平安後期物語にも学びつつ、広く頼通時代の文

芸の趣向を、作中世界に取り込もうと意欲的である。

たとえば、降雪の中での月明かりを愛でる趣向が、頼通の時代に顕著であることは、『更級日記』『浜松中納言物語』『四条宮下野集』などにより明らかであり、既に諸家に指摘されているが、『海人の刈藻』にもそのような状況は設定されている。『海人の刈藻』では宮中における降雪下の月の宴という状況を設定し、歌の唱和や管弦の合奏が天皇の前で披露される。その場面では早くも、歌を通して天皇を中心とする貴族社会の恒久平和の実現が標榜されている。『源氏物語』で表明された師走の月の観賞美、また雪景色に対する美意識なども取り込みつつ、『源氏物語』とは異なる要素を、頼通の時代の文芸から取り込んでいるのである。これが『海人の刈藻』ひいては院政期物語の特質と呼べるものであろう。

また、頼通の時代の歴史的な事実を取り込み、それらを『栄花物語』の叙法に倣い表現することも、『海人の刈藻』では多く行われている。そもそも『無名草子』に「世継をいみじくまねびて」と、その歴史物語取りが最たる特徴であることが指摘されていたことを、重視するべきである。歴史物語取りの濫觴として、『海人の刈藻』は早くから評価が高かった作品である。そのような観点であらためて作中の表現を見直してみる時、「五節・臨時の祭～」と始まる冒頭部を始発として、『栄花物語』の表現や叙法の摂取は著しく、作り物語と同じく、歴史物語もが、物語取りの対象となっていることが明らかなのである。また、『紫式部日記』など、女房日記との関わりも一部に指摘できる。

これらのことから、院政期の物語作者においては、作り物語をも含めて、広く女房の手になる仮名散文が、表現を学ぶに足る対象として信が置かれていた事実が浮かび上がってくる。まさしく女房日記の集積とも評しうる『栄花物語』が、創作の指標ともなったことは自然なことであった。今後の課題として、一つには作り物語のみならず、『栄花物語』を初めとする王朝歴史物語との関わりについても、より積極的に影響関係を見出していく必要があることが明らかとなった。

以上、『海人の刈藻』の院政期物語としての特質を多岐にわたって明らかにした。物語の内実が、協調融和による理想社会の標榜であり、その方法として『源氏物語』に学びつつも、頼通の時代の文芸を吸収し、かつ歴史物語的な叙法をも取り込みながら、平和共存的な貴族社会の実現を、作品の虚構世界の中で目指したものであることが分かった。この分析結果を一つの指標とすることで、王朝物語研究は中世王朝物語研究への展開をも視野に収めた、新たな段階へと進むことが可能となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

横溝博,和田律子,高橋由記,中村成里,有馬義貴『四条宮下野集』研究(三)—注釈編—([平等院『鳳翔学叢』,9,2014, pp.75-84)
横溝博,和田律子,高橋由記,中村成里,有馬義貴『四条宮下野集』研究(二)—注釈編—([平等院『鳳翔学叢』,9,2013, pp.33-90)
横溝博,和田律子,高橋由記,中村成里,有馬義貴『四条宮下野集』研究(一)—注釈編—([平等院『鳳翔学叢』,8,2012, pp.53-118)

〔学会発表〕(計1件)

横溝博"宇屋奉行の源氏学—石出常軒『窺原抄』の成立—" ヨーロッパ日本学協会 EAJS 国際会議.(2011年8月26日). タリン大学(エストニア)

〔図書〕(計4件)

横溝博「国宝『源氏物語絵巻』にあらわれる男と女」(『男と女の文化史(人文社会科学講演シリーズ)』,6,2013, pp.3-43)
横溝博「『源氏物語』女三宮の装着と機能—姫君たちの装着の場面に着目して—」(『源氏物語と儀礼』小嶋菜温子・長谷川範彰編,武蔵野書院,2012, pp.437-457)
横溝博「院政期物語としての『海人の刈藻』—『栄花物語』もしくは藤原頼通の時代からの継承—」(『平安文学の交響—享受・摂取・翻訳』中野幸一編,勉誠出版,2012, pp.232-252)
横溝博「按察家の人々—『海人の刈藻』を中心として—」(『源氏以後を考える—継承の構図』久下裕利編,武蔵野書院,2012, pp.171-202)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横溝 博 (YOKOMIZO, Hiroshi)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30303449

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：